



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

20年ほど前、夏の終わりに私たち家族は米国から帰国の途についた。子どもたちが通った現地の小学校の学年は6月で終わっていた。

列車のコンパートメントに家族で座り、英仏海峡トンネルを通過して到着したロンドンでは、晩夏の街はまだ汗ばむほど暑かったが、古い建物の間から見上

る空は深い青で秋が迫っていた。レストラン広場近くのこぢんまりしたホテルは、街を歩き回するには便利であった。

留学先は所属医局の教授や先輩の紹介・推薦で決まることが多いが、希望する研究機関に自分で応募することもできる。

〈40〉留学の終わり

懇意にしていたアメリカ人の老夫婦に空港まで送ってもらった。奥さまは小学校を定年退職された教師で、最後まで熱心に子どもたちに勉強を教えてくれた。ご夫妻と涙の別れをして、私たちはパリに飛んだ。

帰国の日になった。背の高いロンドンタクシーは、家族全員と大きなスーツケースを乗せ、空港に向かった。家族でずいぶん長い旅をしてきたという感慨と外研究員」として費用を出

もに、漠然とした不安を感じた。もう一人の恩師となったアメリカの教授から、残らないかと誘われたが、日本で診療と基礎研究を両立させたかった。

ポスドクは博士の学位を取得したあとの修行の期間であり、米国ではこの制度が定着している。多くの研究者は、ポスドク修了後に大学の教員として独立し自分の研究室を構えるのである。振り返れば、この期間にアメリカの恩師から得難い教育を受けたと思う。

日本での病原大腸菌O-157による食中毒の終息を待つためにも欧州経由で帰国することにしたのだ。

帰国後、診療の傍ら、大学医局の研究室で大学院生の学位研究の指導とともに、自らのテーマを決めヒペットを握る日が続いた。研究環境は整っていなかったが、滞米中と同じ志で基礎研究を続けてこられたのは、米国でのポスドク経験が心の支えとなり、また励ましとなったからだと思っ

てもいい。

帰国後、診療の傍ら、大学医局の研究室で大学院生の学位研究の指導とともに、自らのテーマを決めヒペットを握る日が続いた。研究環境は整っていなかったが、滞米中と同じ志で基礎研究を続けてこられたのは、米国でのポスドク経験が心の支えとなり、また励ましとなったからだと思っ

パリでは数泊して子ども連れであちこち見て歩い

た。家族でずいぶん長い旅をしてきたという感慨と

外研究員」として費用を出

ている。